

キュウリ



育苗

床土(培土)



●畑の大将<青> 3%ほどを培土に混和しておくか、1ポット当り30gを置き肥すると、徒長せずガッシリ充実した苗ができる。

散水時に散布
(葉面散布・灌水)



●根っ酵素500倍液 →根を強く動かし、生長を促進、シオレ防止。
●花咲くCa液500倍 →茎葉を厚く充実させ、健全な体質を作る。
※播種後、接木まで 毎日~3日間隔、1000倍の交互散布で茎が太くなる。
※接木4日後から、3~7日間隔で、最初だけ1000倍、以後500倍で交互に、葉上からタツプリ散布。(ただし状態により適宜選択)
※定植5日前には、苗の引締め・仕上げに、Ca液を散布し充実させる。

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
本畑の地力作り	なるべく早い時期に投入し、なるべく深く耕耘する (定植までに20日以上の間隔をおく)	<p>●ラクトバチルス600g →通気・保水・保肥性が高く、深層まで肥沃な土に。</p> <p>●堆厩肥2トン以上(なるべく多く) ※前作の茎葉もなるべくスキ込み。</p> <p>秋~晩春の促成ハウス・長期栽培(目標収量15トン)の場合・・・</p> <p>●尿素80kg(N:40kg前後) ※堆厩肥が少ない場合には 硫酸カリ60kg 追加。</p> <p>初秋~冬の抑制栽培(短期)、夏キュウリの場合・・・</p> <p>●尿素60kg(N:30kg前後) ※堆厩肥が少ない場合には硫酸カリ40kg追加。</p> <p>※このチッソは微生物により有機化・地力化して、ジワジワと効く 定植時には土壤EC:0.2以下と、無機チッソが抑えられる。 ※キュウリ畑は多量のチッソにより必ず強く酸性化する。もし土壤pHが極端に酸性(pH:5.5以下)なら、地力作りにも畑の大将<青> 60kg以上を投入する(栽培中は40kg程度)なお下記、整地時にも施す事。</p>
本畑の整地時	整地・ウネ作り時に散布 (全面散布、及びウネ上への散布)	<p>●畑の大将<青> 60kg ※土壤pH:6.5以上と高い場合は田畑の大将<赤>を施す。 ※カルシウム量はチッソ量以上に、多めの施用を推奨。</p> <p>●マンゾク粒状50kg →根張り・生長促進、線虫・ツル割れ・疫病の予防。 ※特に心配な園で農薬の土壤消毒をした場合は、毒性が抜けた後に米ヌカ等に混ぜて、ラクトバチルスを補う。(同時施用可能)</p>

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
植付け時	苗のドブ漬け・植付け直後の灌水	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液 →活着・初期の根張り促進。(必須) 線虫・ツル割れ・ツル枯れ病の軽減。モザイクもかなり抑制。
定植後1ヶ月 (収穫開始の前)	〈根と体質を作る〉 初期の灌水使用 または葉面散布	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素2～5ℓを灌水(倍率は200倍以上、適宜) ※定植から半月間のうちにタツプリ深く灌水し、太根を伸ばす。 (通路中央に穴を掘ってあれば、20日前後でそこに根が達す) ●花咲くCa液2ℓを灌水(200倍以上、適宜)または葉面散布 ※定植後20日頃にカルシウムを与えて、雌花の開花を健全にする。
収穫中の灌水	半月(または1月)の周期で、 灌水施用 3種を繰返し	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素2～5ℓを灌水 →根の強化・尻太などの解消。 ●アミノ酸液(または自家製アミノ酸液肥)20ℓを灌水 →栄養補給。 ●花咲くCa液2ℓを灌水(または葉面散布) →引締め・生殖生長。
追肥	収穫開始後1ヶ月以降、 1～2ヶ月ごと	<ul style="list-style-type: none"> ●硫安20～30kg 上記の灌水施用で不足な場合、状態により。
		<ul style="list-style-type: none"> ●畑の大将〈青〉20～40kg →硫安と同時施用して栄養バランスを維持。 ※栽培中に土壌が酸性(高EC)になった時は、カルシウムで回復。
葉面散布	栽培中の草勢調節 葉面散布 (7日ごと交互、適宜)	<ul style="list-style-type: none"> ●花咲くCa液500倍 →雌花を強くする、べト病・褐斑病の発病時。 ●根っ酵素500倍液 →根・導管の強化、草勢維持、肥大促進、茎葉生長。



カルテック農法では強い花が咲く。
慣行農法ではイボが少ない。
カルテック農法ではイボが多いのが特長。